

# 海軍

## 九死に一生を得た 海軍軍人の話

香川県 湊崎 忠義

私は、大正十五（一九二六）年七月三十日、現在の香川県さぬき市志度で、父喜三郎、母ハツエの長男（五人兄弟妹）として生まれました。徴兵検査は昭和十六（一九四一）年四月（志願）志願入隊で、昭和十七年九月一日、佐世保第二海兵団へ入隊しました。同日海軍四等機関兵を命ぜられました。

私の入団当時の家庭の状況は、職業は農業で水

田約七反、畑約二反、山林約八反位の貧しい農家で、当時の家族は次のようでした。

父 喜三郎 健在 農業

母 ハツエ 健在 農業

本人 忠義 健在

八栗ケーブルカーの運転手（経験約一年半）

兄弟 四人 健在

ということ、私が兵役のため家庭を離れて収入を失うことは、家庭には苦しいことでした。とは言え、昭和十七年の九月と言えば、大東亜戦争の戦勢は漸く劣勢に転じた時機、銃後の情勢はもはや凄愴苛烈な様相を呈し、若き大和男児は競って皇国の防人となり、聖戦に赴くのが当然でし

た。一億総動員の国是の時でした。

私の行動戦域は、佐世保、大連、青島、上海、香港、サイゴン、シンガポール、マレーシア、インド洋、濟州島、横須賀、呉等に及びました。

新兵時代の苦しい思い出は、昭和十七年十二月十日より「第七号掃海艇」乗組を命ぜられ、地上勤務より乗艦勤務に変わったとたん、艦酔いに苦しみ食事ができぬことでした。船酔いも、勤務に伴う責任感や業務のための体の動かし方によって、自然と苦しみが軽減され、いつか食事も普通のできるようになりました。やはり気持ちの持ちよう、勤務上の執念の問題でしょうか。

次に私の従軍期間中の労苦のハイライトである、乗艦の海没、戦友の戦死等の一般社会では体験できぬ、特殊な様相の一端を述べてみます。

時は、昭和十八年二月より昭和十九年の四月頃のこと。私の海軍の履歴表によれば、

昭和十七年十二月十日 海軍一等機関兵を命ず

第七号掃海艇乗組を命ず（即日仮入団）

昭和十七年十二月二十二日 佐世保発「東洋丸」便乗

昭和十八年二月一日 乗艇

第一南遣艦隊第十特別根拠地隊

昭和十八年四月一日

待従武官御差遣御紋章入煙草下賜セラル

自昭和十八年二月一日 至十九年四月十五日

馬来方面に在りて対潜戦闘並びに船団護衛に

従事（戦地戦務）

昭和十八年十一月一日 海軍上等機関兵を命ず

昭和十九年五月一日 海軍機関兵長を命ず

昭和十九年四月十八日

入院者付添いとして第百一海軍病院彼南（ペ

ナン）南分院に派遣を命ず

昭和十九年四月三十日

戦傷者付添いとして第百一海軍病院彼南（ペ

ナン）分院に派遣中のところ、戦病（右急性

化膿性腋高腺炎）に依り同分院に入院

昭和十九年五月三十一日

入院の儘佐世保海兵団付を命ず

昭和十九年六月六日 以下省略する

と記入されてあります。

さて、昭和十八年四月十五日午前十一時頃のこと、私の乗艦「第七号掃海艇」（長さ約一一〇メートル、幅約三〇メートル、小さくとも菊の御紋章が艦首に輝いていた）——基地をシンガポール、ラングーンとしてインド洋上の船団護衛、対潜戦闘に従事していた——が米潜の魚雷攻撃を受け沈んだ。場所はマレー半島の西、インド洋のニコバル諸島のカーニコバルの海中である。

その時、我が「第七号掃海艇」は陸軍を乗せた船団の護衛中、敵の米潜の魚雷三発の内の一発が掃海艇の後部に命中した。後部のスクリュウ、舵の所である。この魚雷命中により艇内の発電器のヒューズがとび艇内は真っ暗となった。その時私は当直で機関室におりました。暗闇の中で手さぐ

りで上のハッチを開けて、甲板へ出ようとする  
と、後甲板より負傷した戦友が血を流しつつ、助けを求めて叫びつつ、前甲板の方へ走るのが見えた。

艇はすぐには沈まず三十分間位は浮いていた。

私は讃岐の金比羅さんのお札を祭っていたのをボート（艇に積んでいた内火艇）へ移してホツとした後、しばらくして掃海艇は爆雷や砲弾の爆発により海水が流れ込み、艇首を上に向けて直立し、後部より沈んでいった。海上は重油が一面に燃えて火の海となっていた。

香川県の三豊郡から来ていた戦友の一人が、その時機関区の居住区にいた。居住区の下の特薬庫の爆発により海中へ逃れた。海は火の海で重油が燃えている。五分く十分位泳いでいた。全身火傷である。友軍のボートへ救助されたが間もなく残念にも死亡。沈んだ掃海艇の軍艦旗で遺体を包んで水葬した。救助艇には私も乗って死体の廻りを三回巡回して別れを惜しんだ。

香川の同県人八人乗り合わせていて、その中の六人が死亡、私と小豆島の人と二人が残った。この時には三日間にわたり戦闘が続いた。

まず第一日目の昭和十八年四月十三日には、日本が米をやつつけた。敵潜も船団を組んでいたらしく、日本側の爆雷攻撃で米潜が沈んだ。敵潜の部品装置の一部と共に、魚が白い腹を晒して沢山浮いて来たと言う。

次に第二日目の昭和十八年四月十四日の件。インド洋のアンダマン諸島の方より飛来した日本軍の戦闘機一機が海面近くの米潜に体当たりをした。敵潜の乗員は助けてやった由。友軍機のパイロットは戦闘機とともに自爆して体の一部が海中にあるのを落下傘のヒモをたぐり上げて収容して水葬したと。

最後の三番目が昭和十八年四月十五日の「第七号掃海艇」の負け戦であった。私はたまたま掃海艇に乗り合わせたが、同県人八人の内生き残り二人の中に入る武運に恵まれました。とは言うもの

のこの時の敵魚雷のショックで左のワキの下に打撲傷を受け、ペナンの第百一海軍病院分院入院、治療を受けました。まあ、結果的には大したことはなくて幸せでした。

私の知っている徳島県の人。私より約半年おそく入隊で十七〜十八歳の若い志願兵です。事故か、覚悟か、海へ飛び込んだのか不明、とにかく夜中の十二時〜一時の勤務交替にいない。捜しても判らない。姿を見た者がいない。行方不明。艇は三回廻って御冥福を祈った。

もう一人、徳島県川島の人。この人は先述の香川県三豊郡の人と同じで、艇がやられた時に居住区にいてやられた。昭和二十一年三月、母親が毎日息子の名を呼び、遺骨箱を抱いて還らぬ人を待つていと言う。それを聞いて私は同じ艇に乗っていた者の務めとして、遺族を訪ねて挨拶をしてお見舞を申し上げ、「昭和十八年四月十五日、インド洋で戦死したことは間違いありません。私

が戦友として戦死を確認しています」と。私は仏壇を拜んで辛いおつとめを果たして辞去したことを覚えています。辛いことでした。

同一の艇の同じ乗組員の戦友同志であった四人が、第一に私はエンジンルームで当直をしていて助かりました。第二に同県の三豊郡の人は居住区にいて火の海で大火傷、軍艦旗に包んで水葬。第三は徳島人で自殺か事故が行方不明。水葬にちなんで三旋回して冥福を祈った。第四は徳島の川島の人。居住区にいて不幸な目に遭った。戦死は確認されている。各人それぞれの運勢に支配され、それぞれの道を辿った。

昭和十九年九月十一日、ペナンより内地佐世保へ帰る。同日第十期普通科内火術（内火班）練習生として、海軍工機学校に入校を命ぜられる（横須賀佐世保間隊伍旅行）。

同日、兼横須賀海軍第三警備隊武山派遣隊付を命ぜられる。

昭和十九年十二月二十二日、第一種症（右鎖骨単純骨折）に依り横須賀海軍病院入院。

昭和二十年一月十五日 全治退院帰校。

同日 第十期普通科内火術（内火班）練習生教程卒業

同日 佐世保海兵団（補）付を命ぜられる（衣笠佐世保間隊伍旅行）

昭和二十年一月十七日 佐世保着、即日入団。

昭和二十年二月四日 「金輪」 艀装員付を命ぜられる（岡山玉野へ向かう、隊伍旅行）

昭和二十年三月十五日 「金輪」乗組を命ぜられる

昭和二十年三月二十三日 本艦役務を警備海防艦と定められ、呉防備戦隊に編入

昭和二十年五月一日 任海軍二等機関兵曹

昭和二十年五月五日 第一護衛艦隊一〇三戦隊に編入

昭和二十年七月十日 第七艦隊第一〇三戦隊（護衛部隊）となる

昭和二十年九月一日 任海軍一等機関兵曹

同日 依命予備役編入

昭和二十年九月九日 退艦せしむ

私の乗艦はインド洋では掃海艇で、今度は海防艦「金輪 カナワ」で大連、青島、濟州島等の船団の護衛です。無事勤め上げて九月九日退艦しました。復員帰郷です。

さて、最後は昭和二十年十月二十日佐世保へ行き、「金輪」に乗組み復員船として国外に居た日本人、軍人、軍属等を日本内地へ連れて帰りました。

鹿児島—— 台湾花蓮港

大分県佐伯—— 上海中国方面

佐世保—— 大連青島

下関—— 濟州島

等の航路を主に航海して任務を果たしました。

昭和二十二年二月頃まで復員船に乗組みまし

た。

終戦後 昭和二十四年の春、結婚

本人 健在

妻 健在

子 五人 健在

孫 八人 健在

曾孫 三人 健在（平成十四（二〇〇二）年

七月現在）

家業は自転車の修理、販売をしています。

「志度モータース」の経営者として五十年近くになり、志度地区の最古参業者になりました。警備振興会の役員歴約二十年です。

最後に戦争時代をふりかえり、戦死した人、負傷して後遺症に苦しむ人、の冥福やら御多幸をお祈り申し上げ、私の今後の生き方をいませたいものです。

乗艦が敵艦の魚雷攻撃で沈められ、九死に一生を得た得難い体験と労苦及びそれらにまつわる思ひ出話であります。